

## 第2回世界災害看護学会（2nd World Society of Disaster Nursing Research Conference）に参加して

広島文化学園大学社会情報学部健康福祉学科  
平 岡 敬 子

キーワード：災害看護，カーディフ

### ■ はじめに

世界災害看護学会（World Society of Disaster Nursing Research Conference：以下 WSDN と略す）は，2008年，災害時における人々の生活と健康に寄与するために，そして知識や情報の共有化を図り，災害時の看護ケアのグローバルスタンダード化に向けた検討を行うために設立された。その第1回目の学会が2009年に神戸市で開催された。今年，第2回目の学会が，8月22日から24日までの3日間，英国カーディフのシティホールで開催された（写真1）。学会を中心となって運営したのは，地元の大学であるグラモーガン大学の健康科学部であった。アジア，ヨーロッパ，アメリカ，アフリカなど世界中の災害看護に関連する研究者，実務者，約200名が集まり，この間，カー

ディフの中心部は国際色豊かになった。

### ■ 開催地，カーディフについて

カーディフ（ウェールズ語：Caerdydd, 英語：Cardiff）は，30万人が住むウェールズの首都であり，ウェールズの最大の都市でもある。ウェールズの南東部に位置し，ロンドンからは約250km，電車で2時間の距離にある。カーディフの歴史は，ローマ人がこの地に砦を築いたことから始まる（写真2）。産業革命以降は，カーディフ港からの石炭の積み出しで産業が飛躍的に発展した。しかし現在，鉱山は閉鎖され，映画，放送などマルチメディアが主な産業である。公用語は英語とウェールズ語であるが，ウェールズ語は英語とは全く異なる言語のため，使える人は少数派である。



写真1 会場となったシティホール手前はパラリンピックのシンボル



写真2 代表的建造物カーディフ城

ひらおか けいこ

〒731-4312 安芸郡坂町平成ヶ浜3-3-20 広島文化学園大学社会情報学部

サッカーとラグビーが盛んなところで、最近の話題で言うと、オリンピックの準々決勝でなでしこジャパンがブラジルを倒した場所が、カーディフのミレニアム・スタジアムである。

ラム肉とチーズ、ビールにワインをこよなく愛すウェールズ人の健康問題は、肥満症である。「セブンブリッジ（イングランドとウェールズを隔てる川に架けられた橋）をわたってウェールズに入ると太った人が増える」と地元のタクシードライバーが言うとおり、見るからにメタボリックシンドロームという姿の人が多く見かけられた。

## ■ 理事会に出席

8月22日午後、学会に先立ち、理事会に出席した。本学は46校ある理事校の中の1校である。参加者は日本、中国、香港、英国の理事校から12名であった。議長である兵庫県立大学の山本あい子教授のあいさつに始まり、中国看護協会をはじめ新しく本学会に加盟した6つの大学・機関が紹介された。続いて、第1回世界災害看護学会（2009.1.8神戸）の理事会報告がなされ、本学会の規定書の完成が報告された（写真3）。



写真3 WSDNの理事会

議題として、理事会で決定されたことは、第3回世界災害看護学会を中国看護協会が中心となって北京で開催することが決まった。また、学会メンバー間のネットワークの構築について議論され、各大学・機関の代表者だけでなく、メンバー全体にメールなどの配信を行い、情報を共有するとともに、代表者とは別に担当者をおくことなどの提案がなされた（写真4）。



写真4 WSDN理事会の参加者

## ■ 学会の内容とその特徴

8月23日、24日は終日、筆者は学会に参加した。開催場所であるシティホールは、ヨーロッパ式の古い建物である。内装は木が主流で、歩くとみしみしと音がする。通常、大学の教室を使って行われる学会とは、全く違う趣であった（写真5）。



写真5 学会会場

午前中は、主にキーノートスピーカーによる全体講演が、午後は、ポスターセッションと複数の部屋に分かれて口演形式の報告がなされた。テーマとして多かったのは、日本からは東日本大震災に関連する報告であった。津波の惨事がビデオ映像で流されたときは、会場のあちらこちらからため息がもれ、涙を流す参加者もいた。英国からは、地元カーディフで起こった鉱山の爆発による被災体験に関する演題が複数あった（写真6）。

本学会の特徴は、日本人参加者が非常に多いことである。おそらく全体の半分は日本からの参加者ではないかと思われた。演題の多く、とりわけ





写真6 全体講演会の様子

ポスターセッションの7割以上が日本の研究者によるものであった。その中の一つが本学の鮎川准教授による「The effect of live music against stress caused by a disaster：被災によるストレスに対する音楽演奏の効果」である。これは東日本大震災後に実施されたチャリティーコンサートをとおして、音楽療法が被災体験を癒すことを明らかにした研究である。ポスターの前には、諸外国の参加者が強い関心を持って集まっていた（写真7）。



写真7 鮎川准教授のポスターの前

また、災害看護の教育に関して、シミュレーターを使った講義と演習の紹介があった。従来のペーパーシミュレーションによる講義と演習では臨場感がなく、災害時の切迫した状況が伝わりにくい。シミュレーターを使用することで、学生に緊張感と臨場感のなかで、よりわかりやすい授業を展開できると強調されていた。現在、看護学の多くの領域でシミュレーターを使用した講義と演習が行われている。コストの問題はあるものの災害

看護の教育方法もその方向にあると推察される（写真8）。

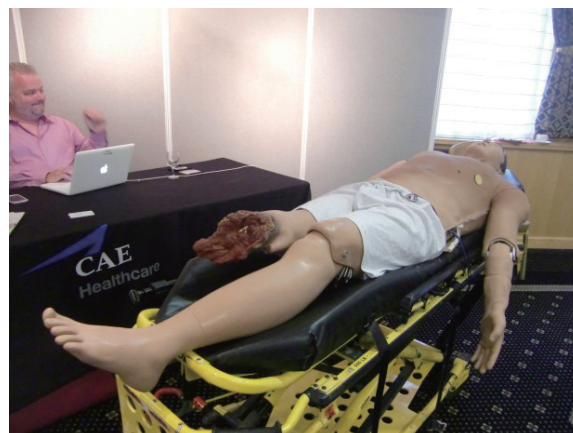


写真8 シミュレーターの紹介

本学会のもう一つの特徴は多彩なイベントである。8月22日、学会に先立ち歓迎会が、会場の隣にある博物館で開かれた。博物館に展示されているロダンの彫刻やルノアール、モネ、ピカソなどの絵画を鑑賞しながら、ワインを片手に、参加者同士が交流を深めた。食事の後は、地元のバンドによる軽快なウェールズの歌と踊りが披露された（写真9）。また23日の夕食会では、ハーブの演奏と男性コーラスが披露され、参加者たちはウェールズの料理と音楽を十分に楽しめるような工夫がなされていた（写真10）、（写真11）。

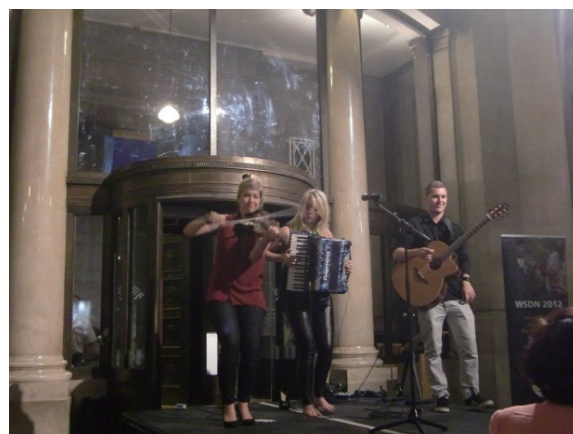


写真9 ウェールズ音楽の演奏

学会の夜の部は、延々11時ごろまで続き、時差ぼけの参加者には少々過酷なスケジュールであったが、これも国際学会ならではの趣向である。



写真10 ハープの演奏



写真11 男性コーラス隊

## ■ 結びにかえて

日本は一昨年、大規模な震災を経験したが、地震や津波などの災害は、どの国の参加者も自国の問題として重く考えており、災害看護の関心が非常に高いことを改めて確認した。

世界災害看護学会は、日本で設立され、第1回目の学会が神戸で開催された経緯もあり、理事校ならびに学会員とも圧倒的に日本の教育機関や研

究者が多い。したがって、国際学会とはいえその参加者の半数以上は日本人である。演題も日本人研究者によるものが多くを占めていた。しかし、残念なことに、日本人研究者は英語をあまり使う必要のないポスターセッションによる報告が多く、口演による発表はほとんどみられなかった。英語力というハードルがその原因であるが、その点、香港やマレーシアなどアジアの若い看護学研究者たちは、積極的に堂々と口演による発表を行っていた。

同時期にアフリカやヨーロッパなど日本ではなかなか出会うことのない国々の研究者と知り合えるのも国際学会の醍醐味である。次回は2014年に北京で開催される。その時は、口演形式の発表に挑戦する日本の若手研究者の姿が多くみられることを期待したい。

## 【謝辞】

このような国際学会に参加できる機会を与えていただいた佐々木副学長に深謝いたします。



シティホールの前におかれた WSDN 2012の看板